

浄土



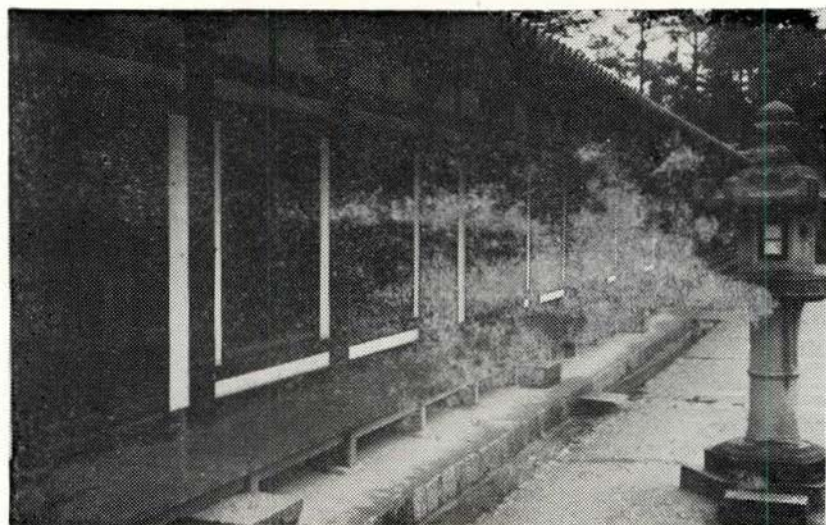
昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認雑誌) 第三五二号
昭和四十六年十月二十五日印刷 昭和四十六年十一月一日発行

第三十七卷

第十一号

1971

11



一 目 次

表紙「インドクジャク」松涛達文画

本質把握……………三枝樹 正 道…… (2)

特集「芸能と仏教」

六斎念仏について……………伊 藤 真 徹…… (4)

謡曲と仏教……………榊 泰 純…… (6)

引声念仏〈国立劇場公演から〉…………… (13)

子に何を語るべきか……………安 居 総 子…… (17)

昭和法然上人伝⑩ 念仏教団への弾圧・配流…………… (20)

浄土歳時記《しもつきの巻》……………若 林 隆 光…… (22)

韓国仏教の外国に及ぼした影響……………鄭 学 権…… (24)

孝子善之丞物語④……………吉 田 光 覚…… (26)

迂闊な話……………塚 原 実…… (28)

「道」茂右エ門への道……………高 橋 良 和…… (30)

浄土宗の古刹を訪ねて(瓜連常福寺)……………宇 高 良 哲…… (32)



念 声 和 語

<占　　う　　心>

この頃の世情は誠に騒然としたものがある。ニクソン訪中、ドルショック、中国承認問題、沖縄国会など、多くの人々は毎日のニュースに一喜一憂していることであろう。世界が狭くなってしまったというか、世界の何処で起ったことも、そのままわれわれの生活と密着するようになってしまった。

つい先頃まで昭和元禄とか言つて経済大国の夢に酔っていたのも束の間で、経済不況の波がひたひたと近寄りつつある。誠に一寸先は分らぬもので、人の心も動揺しようというものである。

ところで、此の頃大はやりの占いは、太平の世でも盛んになるが、人心の不安におののく時も又流行するもので、人生の空しさを象徴していて怪しい。元来、占いというものは、「当るも八卦、当らぬも八卦」といわれる通り、それに執着すべきものではなくて、当たっても当らなくても、自戒の手引きとすべきもので、そこには何物にもとらわれない強固な心構えが要求されるものである。この頃のように猫も杓子も占いで、一喜一憂の人生を送っていることは、占いの本来の姿でないと云わねばならない。

確かに人生の一寸先は闇である。誰も自分自身の一寸先について断言することはできない。しかし逆に、若し一寸先が分つたとしたら、果して人は泰然自若としていられるであろうか。一寸先が闇であるところに、人間の、いや生きとし生けるものの宿命があるのであるが、又其処に人生の花も実もあるといわねばならない。

占いは、この花も実もある人生の中で、一寸先の闇の未来をかりそめにのぞいてみようというのであるから、余りそれに固執してはならない。み仏のみが知る一寸先であれば、それはみ仏にまかせておいて今あるこの命を大切に、悔いのない人生を送るよう努力するのが、み仏の心に叶う道と言えよう。

(安居)



本質把握

三枝樹 正道

(京都市政短期大学学長)

世の中には、とかく主要目的を忘れて末梢的現象について、とやかく云い争いをする人がある。例えばある問題について議論している間に、論がすすむにつれて、いつの間にかその中心課題を忘れて、相互の言葉尻をとらえて論争をする人がある。これでは決して正しい結論には達せられない。学生が自分の本当の目標である研究を忘れてクラブ活動に熱心になるのもその一例である。又助業である読誦、観察、礼拝、讃歎供養に興味が出て称名の正定業をおろそかにするのもその一例である。

考えて見るとわれわれは正しく生きるという中心課題を忘れて、末梢的な日々の快楽に身心を消毛している場合がいかに多いことであろう。永久に生きたい、常恒に平和でありたいという念願は人間の本質的な基本願望

である。しかるにわれわれの日常の生活は果してそれに適応しているだろうか、むしろそうではなくて、不養生に感覚的快楽を求めて命を縮め、利己的快楽を求めて、反って平和を害し、争闘の原因を作っているのではないだろうか。

現在わが国始め世界の各国は公害に悩まされている。これなども社会共同の生活、相互扶助の生活縁起の上に成り立っている人生、この人間の本質的な在り方を忘れて、徒らに利己的な近視眼的な現在の自己中心的な生活のみを考えている結果である。自他共に喜び多くの人々と共に幸福になつてこそ、真の幸福は体现するのである。このことを忘れて、自己の現在の利益のみを求めていては真の幸福にはならぬ。これらは皆本末転倒であつて、

ものの本質を真に理解せず、末梢的現象に眩惑されている証拠である。

かつて、私が京阪電車で大阪から京都へ通っていた時のことである。大阪の天満橋から、ある町内会の慰安遠足の一団が乗って来た。人数は約二十人位であったと思う。いかにも楽しそうに、互にほほ笑みながら賑やかに騒いでいた。一行はお酒の瓶や果物の籠やお菓子の袋等沢山に持ち込んでいたのである。ところが停留所三ッ四ッ過ぎた頃に、その一人が「どうせ飲むのだから車中で一本位あげようじゃないか」といい出した。すると周囲の人の中に「それもよからう」と賛成する人もあって、まず一本をあげて飲みだした。ところが飲むにつれしゃべるに従って声も大きくなり、荒々しくなってきた。盃を交すに従って酔はまわって来て互の言葉も極めてゾンザイなものになって来た。恰度一本のお酒を空にした時に、その中の一人が「まだ沢山あるもう一本あげよ」といい出した。その時他の一人が「もうこれで止めよう、残りは先方へ行ってからにしよう」といい出した。そこで意見が分かれ酔もまわって言葉も荒く、お互いのしり合ってツイに口喧嘩となった。切角の楽しかりしピクニックが一部の人のために修羅場のようになった。しか

も京都の三条駅に着いて大津行きに乗り換える時になったら、これはホントウの喧嘩になって、他の人々はこの二人を気にしながら妙な気持ちになって大津行きの電車に乗り、当の二人はその假停留所で喧嘩のつづきをやっていった。

ここで考えなければならないことは、常に本質を確認しておらねばならぬことである。今自分は学生である。学生なれば勉強研究することである。今自分は親に対しては子である。子供であれば親に安心して貰う様に行為することである。今、自分は兄である。すれば弟妹に対して常に兄として正しい行為をなすべきである。今自分は買い主である。しかれば適正な価でものを買うべきである。今、自分は売り主であるならば買手の満足する良い品を売ることが中心課題である。このように、すべての場合常にその本質的課題を忘れてはならぬ、この中心課題を忘れなければ、その他の末梢的な問題は少々狂ってもまた許さるべきである。

人の一生も、その時代、その場所における中心課題を確かに持つて生活すれば、恐らく極めて楽しく能率的な生涯を送れることであらう。互に注意して末梢的な従属事業に執れないよしでありたいものである。



特集

芸能と仏教

六斎念仏について

仏教大学教授 伊藤真徹

仏教芸能の起源は、ひとりわが国に求められるのみでなく、遠く中国、インドの昔に遡ることができる。即ちインドには五明中に声明があつて、偈頌等を吟詠する音曲歌詠の法であり、それはわが国にも伝えられて、奈良時代から行われていることは周知のところである。

天台宗の慈覚大師円仁には入唐して、五台山で引声念仏と引声阿弥陀経の法を伝えた。この引声念仏の末流は現に各地において行われているが、真如堂ではその正流を伝えるものであると伝承し、現にその寺の十夜法要には多くの講員によつて修せられている。円仁の再興した伯耆大山寺でも引声阿弥陀経と共に近頃まで伝えられていたが、現在では真如堂に

のみ行われている。この引声念仏と引声阿弥陀経は十夜法要を鎌倉光明寺で修することを勅許せられると同時に、移されて現在に至っているが、その曲調は真如堂とは著しく異なっている。

念仏芸能中、近畿地方で断然広く行われたのは六斎念仏である。この芸能は高野山系と京都系に大別せられるが、京都系の中でも空也堂極楽院（京都四条坊門堀川東敵町）を中心とするものと、千葉山光福寺（浄土宗・京都市田中柳下町）を総本寺とする二系統とせられる。光福寺は千葉寺の通称で知られ、この寺の六斎念仏に関する現存の文献資料は、文禄二年（一五九三）秀吉が同寺の一代月空宗心に与えた許状

に、六斎念仏総本寺とあるので、この時既に同寺を頂点とする六斎念仏集団が形成せられていたことが知られる。千葉寺から六斎念仏執行の免許を受けた講中の控帳、即ち宝暦五年（一七五五）改めの『六斎支配村方控帳』には、百三十の集団を数えることができる。それ等の多くは京都の内外が圧倒的ではあるが、遠国の集団も見られる。江州伊香立村と同滋賀郡千野村の名も見出され、千野村の場合、「宝暦十庚辰七月六日五人の者始めて来り、六斎門下に相願い候に付、許容則ち許状一通これを遣す。且つ五人連判の一札これを取置く」とあり、講頭講員五人が連記されているので、許状を受けるには相当の手續きと条件が必要であった。同時にこれに似合う功績のある講中には、菊御紋馬張提灯御免の墨付を出した例も見られる。他面講中の隆替によって「無人に付断申来候、再建の節は相届け申すべく一札これあり」と言う例もあって、一の講を取上げてみれば、その歴史のなかには盛衰消長があることが知られる。

さて千葉寺の『六斎念仏興起』には、「念仏の節目四十八あることは、自ら四十八願を表し、中に於て四遍白米と名のる念仏あるは、四住の煩惱を治し、実相の称名を表するなり。鐘に拘留銘の三音あり、鼓に仏法僧の三声あり。故に三鐘を打って発願文を唱へ、次に弥陀唄・回向唄を称へ、畢て

高調子鐘鼓念仏し、歡喜踊躍す」とある。即ち四遍白米を最要とする四十八通りの念仏詠唱があり、鐘と太鼓に其ぞれ三種の打ちわけ方があることを示し、よって六斎念仏のオーソドックスの修し方は、発願文、弥陀唄、回向唄、高調子鐘鼓念仏することが中心である。

滋賀県で六斎念仏が修せられるのは、伊香立を中心とする湖西地方で、堅田町真野法界寺では古い形態が温存し、現に春秋彼岸、ウラ盆、地藏盆、十夜、葬式の野辺送り等に行われている。これ等の時使用する法具は太鼓八個、鐘四個で、それに参加奉仕する念仏講員は二十五才以上の既婚の戸主である。太鼓八人は本堂正面の両側に向い合つて四人ずつ並び、右側を「オオバイ」左側を「スッポン」と呼んでいる。鐘の四人は「スッポン」の後方に列ぶ。この中の中心人物を「頭者」といい、維那の役割りをする。近畿の多くは八月盆で、十四日の晩講員は各戸を廻つて、戸口で念仏を修し、新盆（年間に新仏を出した）の家では仏前で行う。

わたくしが法界寺の六斎念仏に参詣したのは地藏盆の日で、正午には念仏講が動められ、小憩中、二時頃から老若男女が三々伍々門をくぐつて境内に集う。二時半導師は地藏堂に入つて勤行、講員二名はすでに蔭つた堂前に設けられた一双の「鐘座」に登つて双盤を打ち、講員はその後方に並列して立つ。右

側鐘座の「御頭」の独唱念仏に続き、左側鐘座の「肩口」の唱和を一齋に助音詠唱する。これがいわゆる双盤念仏である。

地藏堂のお勤を終り、つづいて一同本堂に繰込み、導師の徐ろに誦する経文の後、講員一同前記の如き体形で起し、太鼓鐘それぞれの身構えをして、讀に合せて太鼓を打ち、文字通り高調子鐘鼓念仏する。この頃漸く夏の日の輝きもおさまり、湖上を渡って来た涼風が肌に快い。最後に「おろし念仏」を修して、堂内のお勤めは終る。

講員は退堂後、墓地の地藏菩薩の像前、開山上人の墓前、観音堂前で、夫れぞれ地藏讀観音讀を誦しながら太鼓を打つ。その声は比叡の連峰の薄霧の中に吸込れてゆくようだ。

六齋念仏の鐘と太鼓の奏でる妙曲は、莊重華麗、しかも勇猛精進、不退転の念仏を勧めるが如きである。門外漢はただ見とれるだけ、聞きとれるだけであるが、年中行事として毎



「謡曲と仏教」という非常に大きな題をもらいました。しかし頁には限りがありますので、ごく限られたいくつかを具

回この会に遭遇う老若男女は、斉唱して念仏策進の途となる。しかもこの六齋念仏が葬式の野送りに修せられることは、もと講員の連帯感から発したもので、亡者の極楽往生を回向しながら安住の世界に送ることを意識したものが、後広く一般に及ぼされるに至ったと思う。

真野法界寺を紹介したが、『六齋念仏興起』に「高調子鐘鼓念仏し、歡喜踊躍す」の後の部分が独自に発展したものが、京都吉祥院及び同桂の六齋念仏であって、従って法具も各種多様であり、演出の曲目も能、歌舞伎、狂言、舞踊から取材せられ、従って念仏中又は演技の雛子方は浴衣姿であるが、演技の内容に従って其ぞれ豪華な装束と、洗練された演技は広く世に知られているが、共に千葉寺の支配下にあることから推して、その中心は発願文（経）と念仏にある、ことは当然である。

謡曲と仏教

大正大学講師 柳 泰 純

体的に取り上げて、編集者からの責めを果たそうと思ひます。（読者の方々にもです。）

能の二番目物とも修羅物ともいわれている曲は、武士を主人公（シテ）としたのですが、この中から四番だけ（いずれも世阿弥の作）取り出して、そこに描かれている武士の姿を、特に仏教との係り合いを考えてみようと思います。四番とも僧侶がワキ（主人公の相手役）として登場します。なるだけ、原文を引用して（わかりにくいかも知れませんが）、ことば使いを通して、現代人には縁の薄くなった能（又は謡曲）の雰囲気を知っていただきたいと思うからです。

一 清水寺の観音さま

まず「田村」をみると、ワキの東国の僧が都見物に始めて上り、清水寺へやって来ます。春たけなわで地主の桜も花盛り。その場面を次のように謡っています。

ワキ 地主の桜の、花ざかり。夫花の名所おほしといへども、此寺の地主の桜にしくはなし。さればにや大慈大悲の春の花、十惡の里にかうばしく、三十三じんの秋の月、五濁の水に、影きよし。

観音さまの衆生済度の大慈悲心が十惡五濁のこの娑婆世界

に広く行き渡っていることを、春の花が香りをはなち、秋の月が水に映るのに喩えられています。これは本尊の千手観音による表現です。

この地主の桜の下にいた童子（前シテ・坂上田村丸の化身）が清水寺の縁起（長いので省略）を語り、周りの名所を説明して、田村堂に消えてしまいます。ここで中入となり、狂言が出て来て、清水寺の縁起、田村丸の鈴鹿山鬼退治のことを演じます。これは、前半の要約と後半への予備となっています。

ワキ 夜もすがら散るやさくら陰にいて、／＼、花もたへなる法のみち、迷はぬ月のよとともに、かの御経をどくじゆする、此御経を誦誦する、あら面白の折からやな。と謡い出されて後半の始まりです。ここにある「花もたへなる法のみち」には妙法蓮華經の文字が隠されており、本尊前に参籠している僧の誦誦している經典を示しています。これに続いて後シテ（田村丸の霊）の出となります。

シテ 地主権現の花ざかり、清水寺のたきつなみ、まこと一河のながれを汲んで、他生の縁ある旅人に、こと葉をかはす夜声のどくじゆ、是ぞ則大慈大悲の、観音おうこの、直道なる。

ここには観音さまに縁のあることばが謡い込まれています。

「其様けたかき男体の、甲冑を帯して見え給ふは、いかなる人にてましますぞ」という問に対して、シテの謡となつて、名乗り、清水観音への立願、鈴鹿山鬼神退治と話は進んで、戦いの場に観音さまが現われ、力をお貸し下さったことを謡い上げて、この曲は終りとなるのです。少し長くなりませんが、原文によって、その場の雰囲気味わってもらいましょう。

あれをみよふしぎやな、／＼。味方の、軍兵の旗のうへに、千手観音の、ひかりをはなつて虚空に飛行し、千の御手ごとに、大悲の弓には、知恵の矢をはげて、一たび放せば千の矢さき、雨あられと降りかかつて、きじんの勢に乱れおつれば、ことごとく矢さきにかかつて、鬼神は残らずたれにけり。有難し有がたしや。まことに呪詛諸毒やくねび、観音のちからをあはせて、則還着於本人、すなはち還着於本人の、かたきはほろびにけり、是、観音の仏力なり。

特に最後の文は、普門品の有名な句、「呪詛諸毒藥、所害身者、念彼観音力、還着於本人」を、ある部分はそのまま、あるところは柔らかくして使い、変化を付けていることがわかりましよう。

この「田村」からは、清水寺を舞台に選んで、その縁起を

語り、観音さまがお力を信ずる者にお与えになる利益が強張られていて、有名な大將軍である坂上田村丸の武勇譚でない点は、注意されてよいでしょう。

二 妄 執 の 瞋 恚

源義経の登場する「屋島」について探ってみよう。都の僧（ワキ）が二人の從僧（ワキツレ）を連れて、「我いまだ西国を見ず候ほどに」というわけで屋島の浦へ着きます。夕暮れ時なので、「いかに此しほ屋のうちへ案内申し候」と一夜の宿を申入れ、漁翁（前シテ、義経の化身）の許しを得て泊ります。この漁翁が「旅人のふる郷も、都と聞けばなつかしや」と涙にむせびながら屋島の戦いの模様を詳しく語り始めます。「あまり委しきものがたり、其名をなのり給へや」と尋ねられても名乗らず、修羅の時になってしまえば名乗ってしまうであらうといって、中入になります。

ワキ 只今の老人の、よしつねの世の夢心、さまでまでと聞えつる、声もふけゆく浦かぜの、／＼、松がねまくらそばだてて、思ひをのぶる苦ごろも、重ねて夢をまちいた

り。

という都の僧の謡で後半は始まり、後シテ（義経の霊）の出となります。

シテ落花枝にかへらず、破鏡ふたたび照らさず。然れども猶妄執の瞋恚とて、鬼神魂魄の境界にかへり、我と此身をくるしめて、しゅうのちまたによりくる浪の、浅からざりし、業因かな。

登場し終りますと、ワキとシテとの掛合いが始まります。

ワキはやあかつきにも成るやらんと、思ふ寢覚の枕より、甲冑をたいし見え給ふは、もし判官にてましますか。

シテ我義経が幽霊なるが、瞋恚にひかるる妄執により、猶西海の浪にただよひ、生死の海に沈淪せり。

ワキ愚かやなところからこそいきしにの、海とも見ゆれ真如の月の、

シテ春の夜なれど曇りなき、こころもすめるこよひの空、

ワキむかしを今に思ひ出づる、

シテ舟と陸との合戦のみち、

ワキ所からとて、

シテ忘れえぬ、

と続いていって、屋島の合戦で、義経が流した弓を取りにいった話や、能登守教経との舟いくさの話が謡われます。ここ

の義経の姿は、戦いに一生をかけ終ってしまった「しゅうらのちまた」が住み処であるような「瞋恚にひかるる妄執」消えやらぬ武人の姿そのものです。「こころからこそいきしにの、海とも見ゆる真如の月」が照らすではないか「愚かやな」と都の僧が言ったくらいでは覚めやらぬ強い妄執なのです。それが、最後は、

舟いくさのかけひき、うきしづむとせし程に、春のよの浪よりあけて、かたきとみえしはむれる鷗、ときのこえと聞えしは、浦かぜなりけり高松の、うらかぜなりけり、たか松の、あさあらしとぞ成りにける。

と、一夜の夢物語であったことはわかるのですが、旅の僧の力では何ともし得ない、修羅道から抜けられない、武将義経の姿は、いつまでも消えやらないです、「屋島」の上演がなされる限り――

三 弔いの僧

是はしなの国きその山家より出でたる僧にて候。扱も木曾義仲は、江州あは津の原にてはて給ひたる由承り及

びて候程に、御跡を弔ひ申さんため、唯今江州あは津の原へと急ぎ候。

と木曾の僧（ワキ）の次第から始まる「兼平」では、ただ単なる旅の僧ではない性格が与えられています。この僧が矢走の浦に着き、粟津への渡し舟を探します。尉の船頭（前シテ今井四郎兼平の化身）の柴舟を見つけて頼みます。

ワキこなたもしば舟と見申して候へども、折節わたりに舟もなし。殊更出家の身にて候へば別の御りやくに、舟を渡してたびたまへ。

シテ勝も、出家の御身なればよの人にはかはり給ふべし。げに御経にも如渡得船、

ワキ舟待ちえたる旅行の暮、

この「如渡得船」は、法華経薬王品に、仏の慈悲を喩えて「如子得母、如渡得船」とあるのをいうのでしょうか。

柴舟に乗った僧は、何かと船頭に尋ねます。まず、比叡山について、船頭は次のように説明します。

シテさん候夫わが山は王城の鬼門をまもり、悪魔を払ふのみならず、一仏乗の嶺と申すは、伝へきく鷲の太山をかたどれり、又天台山と号するは、震旦の四明の洞をうつせり。伝教大師桓武天皇と御心をひとつにして、延暦年中の御草創、わがたつ杣と詠じ給ひし、根本中堂の山上ま

で残なく見えて候。

次に、大宮権現の御在所を確かめてから、

ワキ有難や一切衆生悉有仏性如来と聞く時は、われらが身迄もたのもしこそ候へ。

シテ仰のごとく仏衆生通ずる身也。お僧も我もへだてはあらじ一仏乗の、

ワキ嶺にはしやなの梢をならべ、

シテ麓に止観の海をたたへ、

ワキ又戒定恵の三学をみせ、

シテ三塔となづけ、

ワキ人は、

シテ又、一念三千の、きを顯はして、三千人のしゅとを置き、円融の法も曇なり、月の、横河も見えたりや。

と問答を繰り返すように話が進んで、粟津に着く、というところで中入となります。これらのものは、直接この「兼平」の話とは関係ないのですが、比叡山の下、琵琶湖畔に粟津があるというので、延暦寺や天台の教学を示すことばを入れて、詞章を拵えていると考えられましょう。PRそのものです。

ワキ袖をかたしく草まくら、ノ、日も暮れよにも成りしかば、あはづの原の哀世に、なき影いざやとふらはん、



と語い始められる後半にな
ると、

ワキ ふしぎやな栗つの原の
草枕に、甲冑しみえ給
ふは、いかなる人にて
ましますぞ。

シテ 誰とはなぞや、うたて
やな。御身はまだ来り
給ふも、我なき跡をとほと、御心ざしにてあらざる
や。兼平これ迄参りたり。

と二人の間答が続いて行きます。船頭に姿を現したのも自分
であることを述べ、次に木曾義仲の最後、兼平の自害の話に
移って、もう兼平の独壇場となります。

そこには自分たちの跡を尋ね弔ってくれる僧を迎える霊の
切なさを感じられ、己の最後を語って聞かせることによつ
て、霊自身も慰さめられてゆくのではないか。とさえ考えた
くなるほどです。回向する僧、語らずには居られない武士の
魂魄、これも業でしょうが。これが「一切衆生悉有仏性」に
よる「一仏乘の嶺」の眺められる所でなされているのは、ひ
ととおあわれさが湧いて来ます。

四 妄執の願い

最後に見る「忠度」は『平家物語』にも描かれて有名な薩
摩守平忠度を扱った作品です。年配の方は藤原俊成が『千載
集』を撰ぶことになり、忠度が自分の歌集一卷を師俊成に託
して都落ちしていった話をご存知でしょう。

「俊成の卿の御内に有りし」僧（ワキ）が西国行脚の途中、
須磨の浦の「若木の桜」に立ち寄ります。その花の本に居た
慰（前シテ・忠度の化身）に逆縁ながら花の陰に宿り、弔っ
てほしいと頼まれます。

ワキ 行暮れて木の下陰を宿とせば、花やこよひのあるじなら
ましと、詠めし人は薩摩の守、

シテ 忠度と申せし人は此一の谷にて討たれしかば、ゆかりの
人の植え置きし跡のしるしの花ぞかし。

というわけ。「有難や今よりは、かく弔ひの声聞きて、仏果
をえんぞ嬉しき」と喜び、「お僧に弔はれ申さん」とて、是ま
で来れりと、ゆふべの花の陰に寝て、夢の告をも待ちたま
へ。みやこへ言伝申さん」と言って「ゆきがた知らず」成つ

てしまします。(中入)

そこで、「袖をかたく草まくら、ノ、夢路もさぞない
る月の、跡見えぬ磯山の、よるの花にたびねして、心もとも
に更けゆくや」ということになります。そこへ、後シテ(忠
度の霊)が登場して来ます。

シテ恥かしやなき跡に、すがたを返す夢のうち、覚むる心は
いにしへに、まよふ雨よの物がたり、申さん為に魂魄
に、移りかはりて来りたり。さなきだに妄執ふかきしや
ばなるに、何中々の千載集の、歌の品には入りたれど
も、勅勘の身のかなしさは、読人知らずとかかれしこ
そ、妄執の中の第一なれ。されどもそれを撰じ給ひし、
俊成さへ空しく成りたまふ。御身はみうちに有りし人な
れば、今の定家君に奏し、然るべくは作者を付けてたび
給へよ、夢物語申すに、須磨の浦かぜも心せよ。

このように妄執やる方なさを訴えます。文武二道に秀でて
いた忠度らしい訴えです。次に、都落ちしてから一の谷で死
ぬまでの自身の行動を語り、後文のように結びます。

御身この花の、陰に立ちより給ひしを、かく物語申なん
とて、日を暮らしとどめし也。今は、うたがひよもあら
じ。花は水にかへるなり。我跡とひてたび給へ。木陰を
旅のやとせば、花こそあるじなりけれ。

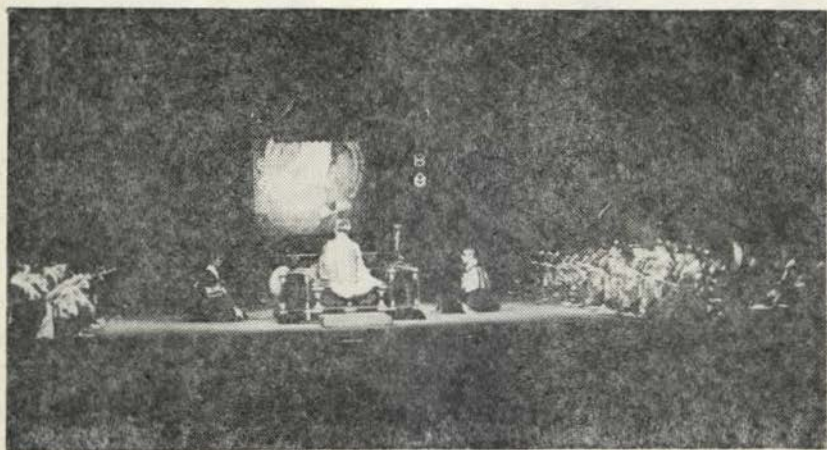
「屋島」の義経は妄執さめやらぬ姿でしたが、この「忠
度」では妄執は消えてゆくのです。勅撰集に自分の名を明記
してほしいことを僧に訴えるために、妄執が残っていたわけ
です。何故、消え得たか、と申しますと、忠度の死んで行く
時の姿を見ると理解できます。

六弥太が郎等、御うしろより立ちまはり、うへにまし
す忠度の、右の肘を打落せば、左の御手にて、六弥太を
取って投げのけ、今はかなはじと思食して、そこ、のき
給へ人々よ、西拝まんとしたまひて、光明遍照、十方世
界、念仏衆生、摂取不捨とのたまひしに、御声のしたよ
りも、痛はくやあへなくも、六弥太太刀を抜きもて、終
に御首をうちおとす。

と、西方浄土を願って死んで行っているからです。最後まで
残っていた妄執がなくなれば、忠度には娑婆世界に心を留め
るものはなくなってしまったのです。

以上、四番について見て来たように、同じ類型を取ってい
ながら、そこに扱われているものや扱われ方は、みな違っ
ているのです。他の類型の場合はどうか、については、もしも
縁があれば、お目にかけられるでしょう。能にはいろいろな
ものが流れ込んでいます。中世日本文化のお花畑です。

——国立劇場第六回声明公演から——



十月十二日、新法主石井真峯台下の御晋山式に始まった鎌倉光明寺の十夜法要は、あいにくの悪天候にもかかわらず十五日まで、多くの善男善女の参詣のもと、古式にのっとり行なわれた。この法要の際誦せられる引声阿弥陀経は四百六十有余年の長さにわたって受けつがれたものであり、今日では貴重な無形文化財といわねばならない。

この法要が去る十月一、二日の二日間、昭和四十六年度芸術祭協賛のもと、国立劇場第六回声明（しょうみよう）公演として、国立劇場小劇場で公演された。今回の公演が行なわれるについては、光明寺の顧問法儀司であらせられる吉水大信僧正の並々ならぬご尽力をまづ記さねばならないが、以下はその伝承歴史と当日の様子にふれよう。

まず引声とは仏教の儀式音楽である声明の一分野で、経文の一語につけられた博士（はかせ）によって、ふしまわしを極端に長く引きのばすもので、旋律の長さが簡略な曲は短声（たんぜい）と呼ばれている。今日では阿

刻引聲阿彌陀經跋

引聲阿彌陀經者在昔慈覺大師於五臺山傳此曲節而歸朝之松上有化佛現示其所遺念夫由來感應審且奇也既而大師授諸徒已降流芳都鄙名蓋古刹莫不皆勤修事具散布舊志也嘗元祖魏例時作法記主言引聲阿彌陀經者是也然以東海之地未有流行山主大和尚命三小子令傳習之欲擴充之爲感發人心攝化之巧便也爰洛陽某精舍有善音藝人乃從效習焉騰竊一本訂正音節錄其概於蘭若云耳係十一年歲次乙巳仲夏上浣

常福會下沙門

義春

涼澄 全修

頌微

〈光明寺享保十年版の奥書〉

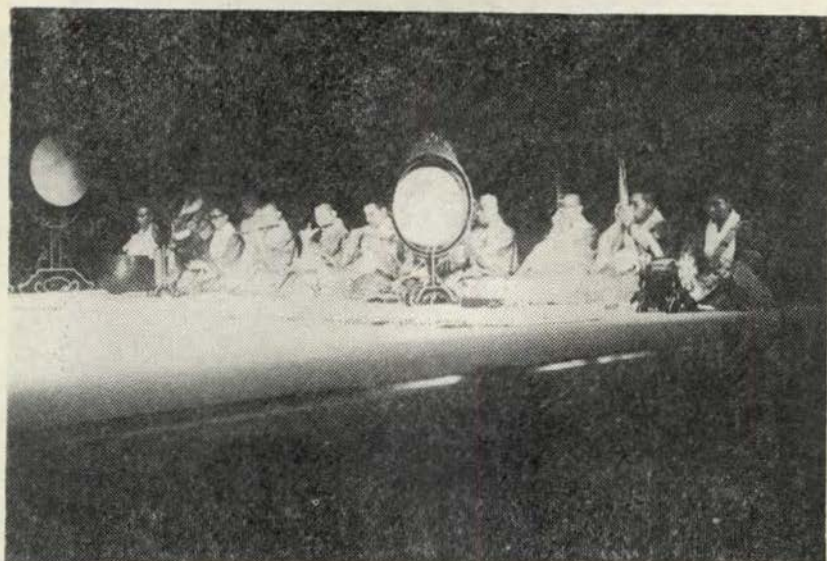
弥陀經を中心とした法要のみが伝承されているため、引声といえは引声阿弥陀經をさすようになったのである。

むかし斯那国法道和尚が生きながら極楽国へ行き念仏の声を聞いて斯那国に伝えた。慈覺大師（円仁）は五台山に入つてその音曲を学び、もつて叡山に伝えた。これに長短二声あり（金剛界大法対受記、巻第六）

これは比叡山の学僧安然が九世紀末に記した引声阿弥陀經の伝来に関する最古の記録である。そして引声阿弥陀經は慈覺大師円仁によつて、師が帰朝後全国各地に建立した寺院を中心に創められたものである。それは延暦寺をはじめ、大原の大原寺、京都の真如堂（真正極樂寺）、鳥取の大山寺などである。

この引声阿弥陀經の光明寺への伝承は、

光明寺八代観誓祐崇上人は、浄土門の学匠であり、人皇百二代後土御門天皇、明応四年（一四九五）宮中に召され、三七日の間阿弥陀經の講説せしめられる。観感斜ならず、実に真正極樂寺の例時作法、引声阿弥陀經、引声念仏を、観誓上人導師となられ、真如堂の大衆を以て儀式を行なわせらる。御感愈々篤く、上人に対し希望を請えとの御詞があつたので、この尊い法要を所望し奉る。天皇速に勅許あらせられ、紫衣を賜り、光明寺に移して恒例の十夜法



＜国立劇場での公演風景＞

要となるのみでなく、後浄土一門の法要となったのである。（吉水大信僧正記）

こうして光明寺に伝えられた引声は十夜法要の際に誦せられ、各時代の宗侶の手により綿々と伝承されたのである。しかし一時期にはその存続が危ぶまれたこともあった。

前述の通り観誓祐崇上人により、光明寺に伝えられる、引声阿弥陀経、引声念仏も、二百有余年後になると、多少衰頹の状況があった。

中御門天皇享保十一年（一七二六）常陸の瓜連常福寺の義誓観徹上人が光明寺五十七代を継がれ転住せられ、十夜の復興を開かれたのである。

観徹上人は前年に三人の弟子を、京都に使わして、引声阿弥陀経を研究せしめられたのである。これを版にして現存している。以来今日に至るまで十夜法要の古式が存続しているのである。（吉水大信僧正記）

こうした経緯で引声は光明寺に伝承されたのである。

音楽というものはいうまでもないが、その音を発した時、その音は永遠に消えさるものである。ましてや現在のように録音の設備のない時代にあつては、その伝承は容易ならざるものがあつたことは想像を待つまでもないであらう。引声に限らずすべての声明曲についても、このことはいえるのであ

る。ことに天台声明にあっては十二世紀末に、それまでの伝統を守ろうとする蓮界坊浄心を代表とする保守派と、蓮入房湛智を代表とする進歩派の二大流派の分裂をみたのである。

そして当時の音楽全般に精通していたといわれる湛智は、たくみにそれを取り入れ、やがてその系統が天台（大原流）声明の主流をなすに至ったのである。

さて、前述した引声阿弥陀経を伝承した延暦寺や大原寺では、この湛智の新流声明の影響を受け、その後は他の引声とはやや異なったものとなったらしい。今日ではこの系統は魚山流と称せられているが、天台声明とまったく同じ構造をもっているのである。

一方、大山流引声阿弥陀経の系流は今日湛智の影響をうけていない、唯一の伝承と考えられている。この一が真如堂であり、一が光明寺に伝わる引声なのである。この大山流の根本道場である大山寺では、その伝承がほほとだえていいる現在、この二つの現在における伝承は貴重なものといわねばならないであろう。それが湛智以前の古流の形を、幾分かみることができからである。そのかげにあって真如堂では、大正年間にその再建整備に当たった故多紀道忍師、光明寺では、享保年間の再興の際の版本をもとに独特の略譜を工夫し、その伝承につとめた吉水大信僧正、この二師の並々ならぬ努力

があつたことを忘れてはならないであろう。

さて、今回の公演の話がでて以来、光明寺では吉水僧正を中心に毎土曜日法式（ほっしき）講習をかさね、さらに増上寺法式会の応援を得て、約十カ月にわたる研鑽の結果を発表したのである。当日は各方面多数の方々の来場を得、第一部真如堂の引声、第二部光明寺の引声として、二時間二十分ほど朗々と誦せられたのである。殊に吉水僧正は、春頃より病魔におかされ、手術後の長い闘病生活をかえりみず、「私の生涯においてこれほどの良い機会はない、舞台上で死のうが本望である」と、周囲の人々の反対をおしての出演であつた。その声は、僧正の生涯をかけて引声伝承の使命感に満つるにたりるものであつた。

この引声の伝承も、この公演に誦された京都黒谷真如堂と光明寺にのみなつてしまつた。絶対に廃絶してしまつてはならない。今日のような機械化された社会にあっては宗教界といえども、この類をのがれ得ないものがある。そうした折、長い伝統にはぐくまれたこの引声の伝承こそ、遠い昔の人々の心と現代に生きる私たちを絶びつけ得るものであるからだ。

△写真提供 増上寺および光明寺▽

——長谷川 記——



子に何を語るべきか

安居 総子

(新宿区立大久保中学教諭)

母親は子どもをほんとうに理解しているだろうか。また、子どもは母親をどこまで知っているだろうか。

ある体験から

中学二年 亀山 明美

母の歴史を書くにあたって、私は、祖父や母の兄弟などに聞いてみたり、母に関する記録を読ませてもらったりしました。また、母自身からは思い出話を聞かせてもらいました。そのほか、母は戦争を体験しているので、戦争に関するいくつかの記録文も併せて読んでみました。これをまとめてみて、いつも身近にいる母のこれまでの生い立ちがよくわかって、ほんとうによかったと思いました。

思いもかけなかった半面もわかりました。私の母は、母を

知っているすべての人たちから、とても明るく朗らかな性格だといわれていますし、私も生まれつき明朗だったのだと思っていたのですが、母が幼稚園時代から小学校低学年まではおとなしすぎるぐらいだったと聞くと、全く意外だということはありません。それがちょっとしたきっかけで明朗な性格に変わっていったということで、母はそれからの人生を自分で楽しいものにしていったと思われます。

戦争は、母の十二歳から十六歳までの間の最も悲惨な事実です。ちょうど私と同じ年齢のときに戦争を体験したわけですから、当時と比べて「今は平和だなあ」とつくづく思います。全校生徒にたった二足の靴が配給になったなど、聞くとは、今はデパートにも靴屋にもあふれるほど靴が並んでいて、どれでも自由に選んで買うことができるのです。物を大

切にしなければならぬと思ひました。学校に配給になつた靴をみんなでくじ引きにした時の話は、人間のあさましさというか、人間本来の飾り気のないありのままの姿に触れたというか、一種のおそろしさのようなものを感じました。だれでも自分を抑える力というものをもっているけれど、それが戦争のようななどたんばに立たされるとその力が働かなくなるのだということがわかつて、少し悲しくなりました。

戦争中はいろいろな物が不足してきて食べる物にもずいぶん困つたといろいろな記録に残っていますが、母の場合はそれは特に強い印象に残つてはいないということでした。それは、母のおかあさんやおばあさんたちがこどもを守つてくれたおかげだと、今も感謝しているそうです。

母の誕生から今までの足跡を書くのには、それは長いことかからなくてはなりません。今度まとめたのは、誕生から戦争が終わるまでとしました。またあらためて、人間として「役に立つ人」になりたいと願ひながら生きてゐる、母の青春時代の精神的な悩みなどを、もっと詳しく聞きだしてまとめてみたいと思ひます。

「母の歴史を書くにあたつて」というのは、夏休みの課題Ⅱ母親の伝記を書くⅡである。ここにもみられるようにこれ

をまとめあげるにはかなりの苦勞をしたらしい。彼女は、母親自身から話を聞くだけでなく、祖父や伯叔父からも聞き、手紙や日記なども資料としてみる事ができたようである。しかし彼女は母親の生いたちの全てをまとめきれずに「誕生から戦争が終わるまで」にしほつて四百字詰原稿用紙二十枚程度に書きあげた。そのあとに述べた感想が前掲のものである。

彼女の感想の中に、「思いもかけなかつた半面がわかつて、ほんとうによかつた」ということと、「戦争のようななどたんばにたたされるとその力が働かなくなるのだということがわかつて少し悲しくなりました」ということがある。これは、母親の伝記を書くために経験した一連の体験なしには生てこないことばである。親子といふものは、生活を共にしているだけで共感的理解をもつものである。日常の対話は肉親關係を認めあうぐらいのもので、日常生活の中では改まって親をみたり考へたりすることなどはまずあるまい。人は逆境にあるときこそ眞の人間性をあらわすというが、親のこういう場面に遭遇することはまずないといつてよい。つまり、こどもは親の人間性に触れることなく大人になつていく。ことに最近のような学校と帰宅してからの勉強とテレビ等に迫られては、親子が語りあう時間さえないといつてよか

ろう。とすれば、せめて親子がじっくりと語りあえる「場」を生活の中に作り出すべきであらう。「親が子に体験を伝える」この体験の上にこそ子どもが地についた考え方をしているのだということをこの話は教えてくれている。

ところで、書きあげた作品を当人に読んでもらった。そうして感想を寄せてもらった。

◇話したことがらは正しく子どもに伝わっていますか。

——はい——

◇伝えたかったことは述べられていますか。——ほぼ——

◇このことはもつと話すべきだったということは。——わが家の戦争のときの記録にはもつともつときびしいものもありました。それを話して聞かせたかったと思います。又、終戦後にはいつそうたいへんな時期がありました。それは冬休みにでも又つづけて話してやりたいと思います。——◇その他ご感想を——思いがけなく私のすぎこし方をふりかえってみる機会を得てうれしゅうございました。——

子どもに語ったことは略伝わったといっている。もちろん彼女の取材の苦勞もあり、それが反映したからでもあらう。彼女には母親に関する情報は一方に偏することなく殆ど事実

を伝えられたとみてよい。しかし事実を知ったことから彼女の母親に対する親愛の情と畏敬の念は増したともいいうる。母親も子どもに語りながら喜びを味わっていただろう。

ある男生徒は次のように言っていた。

——話しあうということは、もつと奥深く理解することになる……一応話を聞き終ってみると（生いたちを）今までの僕と、父が今の僕ぐらいの年までにした道とは、何か共通点があるように思えました。……ふだんの何げない対話がどんなに相手を理解するのに役に立つかということを知りました。——

人間相互に理解しあうことはなかなかむずかしい。どんな意をつくして話しても相手に伝わらなかつたり、わかってくれなかつたりする反面何かがきつかけで水が地にしみこむように相手に理解してもらえることがある。子どもにとって親の語る体験談Ⅱ裸の人間性をみせることⅡには、時に子どもの親近感呼び、親子の相互理解の基盤を作るように思えてならない。それは中学校二年生の時期が最適のように私は思う。



念仏教団への弾圧 (21)

南都・北嶺の教団は、専修念仏に對する嫉妬や無理解から、再三にわたって、朝廷に活動の禁止を強訴したが受け入れられなかった。こうした矢先、建永六年（一二〇六）後鳥羽上皇が熊野に行幸したとき、留守をつとめていた女房たちは鹿ヶ谷しかがだにに通い、哀調をおびた六時礼讃を聞いてすっかり感動し、上人の門弟住蓮・安樂のもとで出家してしまった。帰京した上皇は非常に怒り、この二人を処刑にした。この事件をきっかけとして、南都・北嶺の教団は、執拗に専修念仏の禁断を強訴し、上人は責任をとって土佐に配流された。



配 流 (22)

承元元年（一二〇七）三月十六日、鳥羽から川舟で淀川を下り、土佐に向った上人は、途中摂津の経ヶ島や播磨の高砂浦・室の津で教化を続けたが、ことに室の津で遊女に念仏を勧め、熱心な念仏者に導いたことは有名である。こうして三月二十六日には塩飽島しあきの高たか階しな西仁の家に着いた。その後、生福寺や普通寺などにも参詣されたが、配流の許しの出る十二月までの上人は、村里の百姓や漁民たちに専修念仏をとき、修行者には浄土の教義を説くという意義深い生活の連日を送り、念仏の流布には大きな収穫であった。

松濤 達文 絵
玉山 成元 文

△しもつきの巻▽

野鳥といへば、雀か鳥だけの町寺の小庭にも、霜月の声と共に、一つがい二羽だけは、本物の野鳥がやってくる。実はご夫婦かどうかは確かめたわけではなく、どちらが旦那さまで、どちらが奥さまなのか、さだかではないが、毎朝アベックで、わが小庭を訪れては、一日遊んで帰られる様子から、そう思っているだけのことである。もとよりその方面にはうといこと故、鳥の種類はわからない。形は武蔵野に多い尾長を一まわり小さくして、もっとやせぎすにしたといった処で、くちばしは細く尖っていて、眼のそばから顔の辺りが茶がかったところを除けば、全身は真黒といってよい。尾羽はとがっていないが少し長く、鳴声はお義理にも美声とはいいいかねる、ピーツとか、キーツとかいう鋭い声で、木を渡り歩いている。はじめのご入来はもう十年近くも前になろうか、夜の明けるのを待ちかねたようにやって来て、櫃（か



や）の実をついばんでいたが、人間共が起き出て雨戸を繰る音などがすると、鋭い声と共に退散されるのが常であった。どうして実のなるのがわかるのだろうか、うちはどこかしらなどといひ合ううちに、いつか実は文字通りの種切れとなつて、ご来遊は沙汰やみとなる。そうして二年、三年とたつうち、他にももちの木とか、八つ手の実なども召上るのか、またざくろのほころびるのを待っているのか、だんだん滞留の時間が長くなり、今年あたりは一日遊んでいて、人間もこわがらず、特に黒い改良服姿などはわが仲間と思うのか、かやの茂みで一枝動いて見せる程度にまでなれた。しかし気を許していない証拠には、カメラなど持ち出すと忽ち一声、二声鳴き交してグットバイである。人間が季節を忘れたのか、季節が人間の方に乱されたのか、下町に住んでは、秋の深まりもそれとは見分けにくい折に、よくもまあ季節を忘れず、

〈二松学舎大学講師〉
浅草西光院住職
若 林 隆 光

はずさぬものと、こちらからは訪ねるよすがもない一つがいにはいつも感心させられ、ご気嫌をそこねて、きらわれないよう、ご逗留の一日も長いことを願っている昨今ではある。さて。

お念仏を唱えるのは何か景気が悪く、子供たちもお葬式のようでいやだといひ、とても行住坐臥と参りかねますが、どうしたものでしょうか？

たしかに今の世の中ではおっしゃる通りの面があるようですね。明治以後の教育が、欧米の物の面だけを見て追い付け、追い越せに終始して来た弊害の一つの表われで、お坊さんをテレビなどで茶化してしか扱わない浅はかな考え方とも通じること、まことにけしからぬことです。子供さん相手にそういきまいても仕方がありますまい。「念死念仏」というように、死をおもってはじめて、お念仏も真剣に唱えられることで、お葬式のように思われても一向かまわぬことです。が、現実の生活では一がいによって他人を無視することもあるまいし、そのためにほかのさまたげが起って、お念仏がさまたげられては何もありません。

ではどうしたらよいでしょうか。

時間的に制限をもうけるか、場合を考えるかというように

お念仏を量的に制限するのも一つの考え方でしょう。又自分の耳に聞える程という声の大きさを調整するのもしりょうなやり方かもしれません。でもこういう考え方は何か悪いことをかくれてこそやるようで面白くありません。むしろ心の中にあるそんな気持がお念仏をぐちの代用品にしたり、叱るかわりの聖人風にきこえたりするところにお子さま方の反撥があるのではないのでしょうか。行住坐臥の意味はいつでも、どこでも、どんな場面でもというようにいろいろな意味にとれるでしょうが、喜怒哀楽のさけられぬ平凡人のわたくしたちが、そのうれしいにつけ悲しいにつけ、かざりけなくお念仏の唱えることが出来れば、にじみ出てくるお念仏の味は、自らお子さまにも通じるのではないかと思われまふ。よく世間で「空念仏」と悪口をいいますが、空念仏も念仏にはかわりがないことは、宗祖と阿波の介の念仏にかわりなしといわれたことで明かなことです。あまり味わい深く、有難そうにお念仏を唱えるのをやめて、朗かに唱えるというよりは、お念仏を唱えている生活が朗かな生活であるといったように暮して頂けたら更に結構と思いますが、如何でしょうか。とにかくお念仏はいいものなのですから。



鄭 学 権

(大正大学大学院留学生)

韓国佛教の外国に及ぼした影響

△上▽

古代韓国の文化は東北亜細亜文化の中核的地位にあった。それは一方では東北及び中国大陆の文化を、他方では印度及び東南亜細亜の諸文化を受け入れ、それを咀嚼消化して、独自のものを創造し綜合的新形態を完成したことによる。そしてその文化は、韓国の地理的位置と相俟って、西北の大陸とそして東海の日本などに直接間接に波及した。

古代韓国の文化は、広範囲な問題をもっているので、ここではその中の仏教に関するものを中心に紹介する。これについても、すでに先輩の学者達の発表や紹介がすくなくないので、それ等を参照しながら、わたくしはその一端をのべる。

韓国に仏教がはじめて伝来したのは高句麗の小獸林王

二年(西紀三七二)である。前秦国から伝わったのである。それが新羅にまで伝播したのは、およそ西紀五世紀(訥祇王時代)のことであろう。それ以後、仏教は三国の全域に通じて、隆盛となり、高僧和尚が輩出するに至った。

百濟(聖王時代)から日本に仏教と仏教芸術が伝えられたことは、すでに周知の事実である。一方では、数多い求法僧たちは唐国に渡り仏法を研究し、その中の一部の僧たちは天竺(印度)に渡って仏法と仏跡を探究した。なかでも有名なのは新羅の沙門慧超で、『往五天竺国伝』を著している。師は『大唐西域記』の著者の玄奘三蔵と肩をならべることのできる高僧である。その『往五天竺国伝』は、中古印度研究資料として、玄奘三蔵の

『大唐西域記』とともに偉大な足跡をのこした。また元
曉大師は、韓国の僧俗庶民から「大悟見成」した人とあが
められ、海外の仏教界にも大きな影響をおよぼした高僧
である。師は韓国華嚴の先駆者である。元曉大師は（真
平王三十九年）盤竜の普徳と朗智について修学したとい
われているが、その学問はおおむね自悟自得のものであ
ったといえる。その著書の主要なものは『金剛三昧經
論』・『大華嚴經疏』・『大乘起信論疏』・『初章觀文』・『安
身事心論』・『大無量壽經宗要』・『十門和諍論』等であ
る。なかでも華嚴經疏・起信論疏・金剛三昧經疏は、中
国、日本に広く流通し、その分野における学問の規範と
なっている。曉公疏・海東疏と称されていることからも
そのことは理解できよう。

韓国仏教界における天台宗の位置も見逃すことができ
ない。天台宗は新羅の法融によって、高麗初期（光宗時
代）に伝えられた、それは唐の中期のことである。とし
てその後において中国の天台宗は、五代（五季）の乱に
より經卷がほとんど散佚し、天台宗門が中絶するほどで
あった。そこで呉越王俶（錢俶）は、高麗に使臣を送り
天台宗の經籍を要請した高麗光宗四年のことである。そ
のとき、高麗では、呉越王の要請をこころよく受諾し

た。そこで僧諦観は、天台宗の論疏等の教乗を持って中
国に渡り、螺溪の寂法師に伝授した。これによって中断
されようとした中国の天台宗は、復興することができた
のである。また、このとき諦観が天台四教儀を伝授しそ
の宗旨を広く中国に宣布したことも、中国天台宗に対す
る韓国仏教界の功績といえることができる。

西北の遼（契丹）に対しても、影響をおよぼしてい
る。文宗の時代に仏典でも珍重されている貝多葉經を高
麗から伝えた。遼の道宗のときに、これを一般に頒布し
たのを見れば、いかに契丹に多くの仏典が供給されてい
たかを知ることができるであろう。

このような事例からもわかるように仏教に関するもの
が、大半を占めていたなかには儒教經典や一般書籍も伝
えられていた。高麗史によれば、宣宗の時代に中国の宋
の哲宗は、高麗には善本が多くあるといつて、百篇尚書
以下、計然子十五巻に続いて一百二十九部の書籍を要請
した、と伝えられている。その中にはすでに佚書となっ
ていたのや珍本が多く包含されていたという。このよう
に宋の文化国家建設に対して高麗の果たした役割をみの
がしてはならない。

孝子善之丞物語

第四回

吉田光覚

(岩手県紫波・極楽寺住職)

(一) 地藏尊の説法

さてその晩、善之丞は観音堂に通夜してお念仏を申していた。すると結構な乗物二丁、供人三十人程がやって来てお堂に上った。堂内は急に真昼のようになった。お籠から二人の女性あらわれる。地頭の奥方かと思つて善之丞は片隈にひそんでいた。上臈の婦人から声あつて、

「善之丞、善之丞、汝、父が病を歎き、夜な々々参詣する孝心のほど称揚るに言葉なし。疲れを慰めんため御神酒を与うべし」と

善之丞、三献まで押し戴くに、その味天の甘露もかくやと思う程であつた。それから上臈の婦人、更に言葉次いで言われるには、

「汝、只勇猛精進に念仏して極楽往生を願うべし。さすれば我又、時折来つて会うべし。父の病苦も快癒すべし」と。

善之丞ありがたさに合掌して見上ぐれば正面の高座に、御丈七尺ばかりの地藏尊座し給いて説法を始められた。

「人間の吐く息日に二万七千度、その息一息も仏の方へは向かず。皆三悪道へ向つてゐる。その人息絶えるとき、自分の惡念の息風に乘つて三悪道に墮すべし。この理を知つて日頃お念仏を唱へ浄土を願う人々は三国一の智者たるべし。」

若し、称名のみでは往生は得難いなどとお念仏を疑う者は、一度疑へば千里ずつ極楽に遠ざかる。ゆえに真実に念仏する者へは、弥

陀如来日に千度在して聖衆と共に行者を護り給う。お念仏一辺の功德は実に十八万八千億の罪を滅すなり」と、細々お説きになられた。

(二) 孝心の起死回生

廿三日目二月十二日の夜はとりわけ寒風激しく大雪が積つた。善之丞は八幡宮より薬師堂へ向う途中、倒れてしまつた。

「我神仏に願をかけて未だ果さない中に死ねば父の快復覚束ない。誠に無念」と夢うつつに思つた瞬間、善之丞の髪のもとりをつかんで雪中から強く引上げる者がある。六十才位の黒衣を召し裸馬を曳く僧侶であつた。善之丞の雪をふり払つてその馬に乗せてくれた。この馬の背から湯気が立ち昇り忽ち小春日和のように暖かになった。この駒の走るさま目がまわるようですぐ薬師堂に着いた。善之丞は蘇生した思いで祈願を済ますとかの僧再び善之丞を馬に乗せた。その時、菩薩の形した方が十二人、幡天蓋などをさしかざして馬の前後を取因んで観音堂に向つた。途中一人の菩薩が言われるには、

「念仏して極楽に住生する人をは、我々十二人がこうに送るのだ」と、観音堂へ着くと黒衣の僧、

「われは汝が氏神八幡である」と仰せられ光明を放って飛び去られた。菩薩方も消えた。

(三) 火の玉の奇瑞

善之丞は只、ありがたさに目を潤ませ御跡を伏拝んでから観音堂に上り、心静かに念仏していると、落雷のような大音と共に火の

玉が現われた。善之丞は身をすくめて高声にお念仏していると、その火の玉が二つに割れて光明四方に輝き、白雲が群り起って堂内に充滿した。その雲上、左の方に弥陀三尊、御丈五尺余が立たせ給う。その側に観世音三十三体、何れも五尺ばかりが皆、蓮華をお持ちになり金蓮に乗られて並び玉う。又薬師の十二神将と覺しきも見える。その奥の方に大きな一かかえ程の金色の宝樹あり。大枝三本に分れ、小枝が四方に垂れ五色の葉あざやかに金花満開である。



△岩手の農家で発見の絵伝から▽

微風吹き来ってその枝に触れば妙なる音楽聞いて耳を悦ばしむ。次に又、種々の御影をした神天五百体余手に幣帛、剣、鉾などの器を持たれて白雲に乗じた姿が腰より上だけ見える。其の中に殊に貴い御姿で白装束に白幣を持玉えるのが、まっすぐ降りられて宣うよう。

「われはこれ天照大神なり。汝十三才の時遙々わが許に参宮せし志納受して忘れず、汝が定

寿六十二才なるべし。今一度伊勢に詣ずべし。必ず待つぞ」と。

(四) 蓮台に乗せられて

此時、雲中に八幡大菩薩も以前のお姿で現れるや、二丈計りの金蓮華一茎生ず。ふり仰いでみれば地藏菩薩、御丈七尺ばかりが御手に宝珠と錫杖を持って立たせらる。善之丞に「父が病の因由を見せよう」とて錫杖の柄を指出し玉う。善之丞よろこんで錫杖に取付くと、地藏菩薩は踏んでおられた蓮華の真下の一葉に善之丞を乗せて呉れた。すると善之丞は鳥毛のような身の軽さを感じた。それから北方に少し歩ませ玉うと思ふほどに遙かに谷底のようなところに降りられた。

菩薩の乗られた蓮華の下に白雲一屯常につき従って離れず。菩薩の御頂上をおがめば円光さながら暗夜の松明を見るようで、光明四方に輝き、その余光は菩薩の通り過ぎられた跡二町余も遠くながびていた。地藏菩薩の御相好の美しくさは何に譬えようもないほど麗わしく尊く見えた。

「……左のおん手にて、六弥太を取って投げのけ、今はかなはじとおぼしめして、そのきたまへ人々よ、西おがまんとしたまひて、光明遍照 十方世界 念仏衆生 摂取不捨 とのたまひしに、おん声の下よりも、いたはしやあへなくも、六弥太太刀を抜き持ち、つひにおんくびを打ちおとす……。」

私がこの「忠度」を、どこかの舞台で舞ったとき、いつも御批評下さる細川護立様が、——桜間伴馬は、こここのところをこのような型で舞った。ここの拍子はこのように踏まれた。——などと、いろいろ細かにお教え下さったことがございました。

私が忠度を舞った当時は、別に深い意味も知らずに、片手で西を拝し、「……念仏衆生、摂取不捨……」の謡を、軽く耳に聴きながしていた訳でございますが、去る四月七日、私の長男堯（たかし）が、交通事故のためフランスで客死いたしました、その告別式を執行いたしましたところたまたまお経を拝聴中、

迂闊な話

——横浜市南区在住——

塚 原 実

この「念仏衆生、摂取不捨」の文言が誦されましたのを聴きまして、改めてその意味内容に、深く心を打たれたのでございます。

この謡曲「忠度」は所謂源平時代を背景としており、恰度法然上人御布教の時節で史実によれば平重衡や熊谷次郎直実等が上人に後生菩提のまちびきを求めた時代でありまして、所謂五濁惡世の戦乱の巷にあつて後生を頼む人達が、ただ念仏すれば必ず往生するとの弥陀の誓願によつたのは、当然のことと思われまふ。

今迄、長い間、迂闊に謡ったり舞ったりしていた私も、気がついてみれば、「小袖曽我」の五郎時宗も「……百万遍の念仏、父河津殿に供養する……」とあり、名曲、「隅田川」などは母が亡き子を弔らう念仏供養の場がこの曲最高潮の見せ場になっておりますし、全般的に能に登場するワキの多くは、殆ど浄土宗の僧で占められていること等に思い至った

次第でございます。

私や、亡き堯が、平生親しんでいた能というものが、日本固有の文化の中でも優れたものであることは知っておりましたが、それがこのような、浄土信仰の宗教的雰囲気の中に展開されていたということを、今更ながら身に泌みて知った訳であります。

扱て告別式の終りに際し、導師の御発声で、参列者一同、「南無阿弥陀仏」を十遍唱和いたしました。そのとき私は子を失った心境の中に、せめてもの慰めと妙号を唱えておりますと、これが亡き子に対して私が今なし得る最善の供養ではないか……と、念仏一遍ごとに、次第に強く思われてまいりました。そして御唱和下さる参会者御一同様の合唱の音が、導師のお声と一つになり、私の声もその中に溶けこんで、何も彼も、総てが南無阿弥陀仏の声のみになったような気がいたしました時——それは清冽な清水のように、私の身心を隅から隅まで洗い流してくれたよ



うに思われたのでございます。

——この境涯こそ、自他ともに成仏する念仏供養の至極ではなからうかと、始めて三昧の境地を、私なりに瞥見できまして、有がたくおもった次第でございます。

平生、お経を唱えぬ俗世の身は、せめてお寺詣りのときは、亡き子の名を呼ぶおもいで、仏の名を唱えたいものだ……と、思ったことでございます。(それはお宗旨とは、違いかも知れませんが……)

一人で称名念仏するよりも、十人、百人或は千人の人が、一堂に集まって唱和することができましたら、同行の徒として、どんなにか心強く、且つ清々しい境地に遊ぶことが出来ようかと思われます。老若男女貴賤都鄙、共に手をとって一味平等の楽園を築くことが出来たら……。

こういう夢はいかがでしょうか。

台掌



茂右衛門への道

高橋 良和

ついこの間、京都西山の粟生光明寺本山の境内に、茂右衛門屋敷跡の碑が美しく垣をめぐらし、整備された。

そしてこの茂右衛門屋敷跡についての解説の駒札がその場所に建てられている。この茂右衛門屋敷跡の記念の碑は、昭和三十六年の法然上人の大遠忌のときに建てられたもので、もう十年になる。

一体茂右衛門というのは法然上人にとって如何なる人であつたのだろう。

そこで史実を調らるべく何度となく光明寺本山に出かけてるが、誰もそれを知っている人がいない。

それでさる日、この碑の整備記念法要の機会に、同宗の元管長であつた丹羽賢竜上人にたずねてみると、いや、その史実はわからぬ、わしは若いころから、西山の碩学である関本諦承大僧正から聞いた話で、茂右衛門のことを顕彰してもらいたいと、何度も話を聞か

されているので、それでこの屋敷跡の顕彰が出来てうれしい。

ということで、丹羽上人もその辺はどうもはっきりしないらしい。

伝説にはよくこういうことがあるものである。それであるから興味が湧くので、史実にちゃんとはっきりしているなら、史学者が問題にするところである。

史実にないから温い血が流れるような語り草だつて生れてくるので、伝説はそーとふところに入れてしまつておきたいような、たのしいものもある。

茂右衛門もその一人であつて、なんでも法然上人が、二十四才のとき、比叡山を出て洛西嵯峨釈迦堂に参籠し、そして奈良に赴くべく、この西山の広谷にきたときは、この茂右衛門の家に一泊したというのが話のはじまりである。

茂右衛門はこの土地の庄屋であつたらしく、この道行きの僧を我が家に泊めて、その僧の相好をたかめたから、あなたは必ず出世されると思う、そして将来立派な僧侶になり、世のなかの人々を化益されるだらう。そのときにはまず第一にわたしを教化して欲しい。と語つたのである。

若き日の法然上人に対して、茂右衛門は大きな期待をかけたのである。

法然上人はそのことばを聞いて、その後はこの茂右衛門宅に厄介になり、翌朝奈良に赴き、そして何日かすぎて再び比叡山の黒谷青竜寺にかえつたのである。

それからなほは二十年間を経過する。

四十三才で立教開宗した法然上人は、友人としても、二十四才の折にこの西山の地で一夜の宿を提供してくれた茂右衛門のことが忘れられず、比叡山を下つて第一番に訪ねたのがこの西山の地であつたので、それも茂右衛門のところなのである。

茂右衛門は二十年前のあの二十四才の若き僧であつたその人が、法然上人であること、再会をよろこび、ひたすら道を求めて法然上人の化導をうけた。

その茂右衛門の屋敷跡がこの碑なのである。もちろん

人物も架空であるし、またその屋敷跡もわからない。

然し伝説として、西山関係の人々の間で今日まで茂右衛門のはなしは語りつづけられている。

それで、もしこの茂右衛門が実在の人物であるとするなら、法然上人の弟子といつても、信者の第一号は茂右衛門であるといえる。もちろんいろいろな貴族や、知識人や、武士もたくさんいるが、比叡山を下つた法然上人が第一ばんに化益したのは、茂右衛門ということになる。おもしろいことである。

元来法然上人は、親鸞聖人や、日蓮聖人に比らべてこゝうした伝説の少ないと思つていた。

ところが最近いろいろなことで、上人の道すがらを調べていると、諸所に伝説がたくさん出てきた。

出てきたというより、それぞれの地域に知られないままに、そーっと抱きかかえられていたような気がするのである。

茂右衛門伝説もその一つであるし、それにこの地には遊蓮房円照という念仏者が居たこともはっきりしたので、この機会に茂右衛門をもう一度掘り下げて調らべたいと思つているが、それもさることながら伝説の屋敷跡が立派に形を整えたことがうれし。

浄土宗の古刹をたずねて

瓜 蓮 常 福 寺

今回の浄土宗由緒寺院めぐりは関東の水戸近在の瓜蓮常福寺について紹介してみたい。御存知の方も多いと思われるが、常福寺は室町時代における浄土宗中興の祖としてあがめられる聖岡上人の勉強された寺であり、関東十八檀林の先駆的な役割りを果している。江戸時代における檀林教学の基礎はこの聖岡・聖聡両上人の時代にほぼ形成されたものといっても過言ではない。

写真①は現存する数少ない誉聖岡上人の自筆の書状である。この書状によると常福寺は延文三年（一三五八）太田城主佐竹義篤から寺領を寄進されており、このころに聖岡の師了実によって開山されたものであろう。それを聖岡は弟子の了智房に常福寺の別当職を譲与するのであるが、もしお前が死んだら跡は聖紀房に譲れという先のことまで注文をつけている。このころ聖岡の許には数多くの弟子が集っていたため

であろう。嘉慶二年（一三八八）二月、聖岡が住職して間もない常福寺は流火によって焼失してしまった。聖岡は寺の復興に尽力しているが、この応承二十二年頃まではかなり復興していたらしい。この間に数多くの著述のものにした聖岡の苦勞は大変なものであった。その体験がこの譲状に細かな配慮としてあらわれているのであろう。

また常福寺は早くから学問所として著名であり、宝徳四年後花園天皇から勅願所の綸旨を、また天文十二年、後奈良天皇から勅額の綸旨をもらうなど室町時代における関東の代表的な浄土宗寺院である。江戸時代に入ってから、元和元年の浄土宗諸法度のときには、常福寺は国師存応から法度の写しを送られ、表門中にかかげており、檀林寺院として活躍していたことは確かである。

また写真②は増上寺の業誉還無が常福寺に下した法度である。これによれば常福寺は増上寺から常陸一国の浄土宗寺院の本寺に任命されている。そして家康の浄土宗諸法度に従い、末寺の監視にあたることになっている。このころになると常福寺は同地方における地位も確立し檀林としての寺院活動を全うしていたことがわかる。

（宇高良哲）

康渡

蓮華地常福寺別當

聖問讓狀

石當寺者清嘉祥寺進地先師
以寶用山砌也然今其後子
以智房も房也守先規下政
御所精精誠と云ふ第一進
公入藏之故存可令相繼子
聖紀房仍副之信 言狀以信

應永廿二年

未 八 廿二日

石當寺

從

一 常福寺於清嘉祥寺一宗寺常陸一國

一 清嘉祥寺於清嘉祥寺一宗寺常陸一國

一 清嘉祥寺於清嘉祥寺一宗寺常陸一國

一 清嘉祥寺於清嘉祥寺一宗寺常陸一國

一 清嘉祥寺於清嘉祥寺一宗寺常陸一國

一 清嘉祥寺於清嘉祥寺一宗寺常陸一國

一 清嘉祥寺於清嘉祥寺一宗寺常陸一國

檀林法度

「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一力年金一、〇〇〇円
(送料不要)

浄土 十一月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和四十六年十月二十五日印刷
昭和四十六年十一月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

“御年始のご挨拶がわりにご利用を”

『浄土宝暦』

- ・ 一部 25円 (200部以上より 単価23円)
- ・ 送料実費 B6版 40頁

『修養日めくり』

- ・ 一部 100 円 送料実費
- ・ 用紙33枚 タテ37cm ヨコ13cm
- ・ 見本お申しこみは150円お送り下さい

《前田聰瑞・大野法道・中村弁康編》 本会発行

三 碩 学 『浄土宗読本』 覆 刻 版
の 名 著

価 1000 円 ㊦ 150 円

時代を越えて浄土宗の真髓を平易に説いた不朽の入門書を浄土開宗八百年を期して世に贈る。浄土信仰の意味と価値・法然上人の念仏の教えを日常生活に実現する仕方・仏教徒としての心得等々。この一冊あれば浄土宗は勿論仏教のすべてがよくわかる無類の名著。

各々御用のむきは早目に本会へお申込み下さい。

東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5 9 4 4 番